Traditional Crafts in Nagasaki

Nagasaki Pottery & Handicrafts

長崎の焼き物。

数百年の歴史を誇る、
波佐見焼と三川内焼。
日常食器や献上品など、
それぞれの辿ってきた
歴史は違いますが、
今なおその技術は
受け継がれ、
現代の暮らしに
馴染む素敵な
やきものが生まれ
続けています。

波佐見焼

今からさかのぼること約400年。1599(慶長4)年、波佐見町の3か所に登窯が築かれたのが波佐見焼のはじまりといわれています。江戸時代に生まれた、簡素な染付けが施された「くらわんか碗」は、丈夫で割れにくく厚手で、「磁器は高級で手の届かないもの」という当時の考えを覆す、庶民の食文化を支えた日常食器でした。現在も波佐見では、日々の暮らしの中で普段から活用できるようなうつわ、そして使いやすく機能的な食器が作られています。美しい白磁を中心に、モダンなデザインや暮らしに彩りを与えてくれそうな新しい感覚のものまで、手ごろな価格で良質なやきものが作られているのです。

写真上●コンプラ瓶／江戸時代、醤油や酒を入れて輸出していたという「コンプラ瓶」。どっしりとしたフォルムはヨーロッパ人による注文といわれています
写真下●染付霊芝文碗／江戸中期のくらわんか碗。厚手のフォルムに素朴な絵付けの、庶民のための器です
(ともに波佐見町 蔵)

三川内焼

1598(慶長3)年、平戸藩主松浦鎮信公が、平戸で窯を焼かせたことが起源とされています。その後、さらに良質な材料を求めて東へ移り、1637(寛永14)年に現在の三川内町に平戸御用窯として定着しました。開窯以来、三川内焼は朝廷や将軍家への献上品を多く作り日用品から室内装飾品にいたるまで、陶工たちは常に高度な技術が求められていたといいます。そのため、透かし彫りなど、ほかの産地では到底作れないと思われるような製品が熟練した名工たちの手によって生まれたのです。また、江戸期の細く繊細な筆づかい、明治期の薄くて軽い卵殻手など、美しさが際立っているものが多いのも、三川内焼の特徴です。

写真右●染付菊秋草文瓶(18世紀)／日本画のような美しい絵付けは、献上品としての格式の高さがうかがえます
写真左●染付雀竹文大皿(18C中)／少し黄みがかった気品ある白地に、細く繊細な筆づかいで描かれた染付けが美しい
(ともに佐世保市 蔵)

長崎の手仕事。

長崎県には、
昔から伝えられてきた
伝統の
技術があります。
大陸の玄関口として、
海外との交流を
通じて栄えてきた
歴史と文化、
風土が複雑に
絡み合いながら、
独特の手仕事の
技が磨かれてきました。

古賀人形

日本三大土人形に数えられる古賀人形。1592(文禄元)年にはじまり、400年以上の歴史を持ちます。「西洋婦人」や「阿茶さん」といった鎖国時代に居留していた外国人などをモチーフにした長崎らしいデザインと、独特の土の素朴さ、大胆な色使いが特徴です。全部で90種類ほどある古賀人形の型は、江戸時代から代々伝わるもの。新しい型は作っておらず、大切に受け継がれています。古賀人形は代々、古賀村(現長崎市中里町)の小川家に伝え継がれてきたものです。粘土こねから窯焼き、彩色まで、全て手作業で行い、一つ一つ大切に作られています。

写真右●阿茶さん／優しい表情が癒される阿茶さんは、江戸時代に長崎にいた唐人さんがモチーフになってます。寂しさを紛らわせるためにチャボを抱っこした姿だそうです

佐世保独楽

優美さと異国情緒豊かな色彩を持つ、全国的にも有名ならっきょう型のこま。その形は南方から中国を経て、長崎に渡来したものといわれています。青(緑)、赤、黄、白(生地の色)、黒の色使いは、中国の陰陽五行説に影響されています。先端には鋭い剣が打ち込まれていて、2人以上でぶつけ合って楽しむ喧嘩ごまとして遊ばれています。

ながさきめぐり Nagasaki Meguri A Guidebook to Nagasaki

●問合先／県の企業振興課 電話 095-895-2637